

2021. 7. 25

No.225



編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minginga@agate.plala.or.jp

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」

02740-7-56535

(郵送年間2,000円)

平和・人権・環境を伝えて33周年

コロナ感染がさらに拡大しているのにオリンピックが強行されました。人命第一に考えてほしかったです。驚くことがたくさんありましたが、開会式の演出担当者のユダヤ人大虐殺をコントの題材にしていたことなどが明らかになり、海外のメディアが日本人は過去の歴史を知らなさすぎると批判しました。人権感覚の欠如は、政府の姿勢そのものに思えます。誰のためのオリンピックなのでしょうか？



7月16日 赤岳第二雪渓からニセイカウシュッペ山を望む

1988年7月10日に創刊した「銀河通信」が33周年を迎えました。こんなに長く続くとは思っていませんでしたが読者に支えられました。

2008年5月25日に20年かかって150号になりました。この号ではヒマラヤトレッキングに参加した時の紀行文を書きました。読み直して今のミャンマーの軍事クーデターや香港で民主化を求める人たちが弾圧されている状況と同じことが行われていたことに気が付きました。

ネパールのポカラでは、チベット難民が暮らす村がありました。宗教の自由を求めて平和的にデモ行進していた若い僧侶たちが中国の軍隊に殺された写真が何枚も張り出されていました。私が訪ねた寺院では、僧侶の死を悼み、成仏できるようにたくさんの僧侶が祈っているところでした。負の歴史は繰り返してはならないと思います。

コロナ禍で、人と会う自由も、旅する自由もなくなり2年近くになります。こんな通信でいいのだろうか？と悩むことが多くなりました。200号をゴールに考えたこ

ともありました。でも植村隆さんの裁判を支える会の活動を通して、不都合な歴史をないものにした勢力が司法にも影響を与えていることを知りました。三権分立と授業で学びましたが、納得のいく判決ではありませんでした。

平和・人権・環境問題を市民の目線でもう少し伝え続けたいと思います。

読者にも番組があるたびに紹介してきたドキュメンタリー「ヤジと民主主義」が日本ジャーナリスト会議(JCJ)賞を受けました。7月15日朝日新聞道内版に大きなインタビュー記事が掲載されました。HBC北海道放送報道部の山崎裕侍編集長と長沢祐記者に聞く(抜粋)

山崎「ヤジを飛ばすぐらいの自由がないと、自由にもものが言えなくなると思います。おかしいと思ったら、そこから議論を始めればいい。もちろん、公



赤岳のコケモモ

職選挙法の選挙妨害にあたるような組織的なヤジだったり拡声機を使ったりしたものであれば問題ですが、あの時は一個人による

地声のヤジでした」

長沢「道警は問題発生から事実確認に7カ月あまり要したうえで、違法性はないと結論づけました。しかし、公権力を有する組織だからこそ、もう少し丁寧な説明が世間にあってしかるべきなのではないかと思います。個人的には、道警を管理する公安委員会を所轄する知事に、もっとリーダーシップを発揮してほしいとの思いがあります」

山崎「民主主義というのは少数の意見をいかに取り込んでいくか、みんなが納得して進めるというのが本来のあり方であるはずが、今は強行採決なり数の論理なりでどんどん決まってしまう、政治が全然説明責任を果たしていない」「私たちがふだんから努力していかないと、よりよいものにできないのが民主主義だろうし、そういうところに光を当てて番組を作るのも報道の役割だと思います」

大雪山系赤岳は高山植物が見ごろです



7月16日 赤岳第二雪渓を登る

7月16日、旭川方面は33度の猛暑の予想。家族の病院通いが続き、自然に触れたいなと思っていたら、山友から「山に行くよ」と誘ってもらい、自宅近くを午前4時半に出発し、3人で赤岳に登りました。

層雲峽を超え、長い林道を走り銀泉台に到着7時40分。バスで到着した人や、駐車場はすでに8割の車で埋まっていました。

身支度を整え、標高1516mの銀泉台を出発しました。赤岳登山口は8時でした。第一花園付近は残雪あり。ウコンウツギ、ウラジロナナカマドがたくさん咲いていて、その美しさに初めて気が付きました。第二花



雪渓を散歩中のエゾシカ



ウラジロナナカマド

園は全面雪。エゾシカがのんびり歩いていました。キバナシクナゲも多かったですが、この暑さで散ってしまったようです。がれ場を過ぎると奥の平です。



コマクサ



キバナシオガマ

エゾコザクラが可憐に咲き、チングルマの群落が見事でした。コマクサ平ではコマクサ、チシマキンレイカ、キバナシオガマ、コケモモ(1面の写真)、エゾノツガザクラ、イソツツジなどが見頃でした。

若い女性4人組が、男性ガイドと一緒に登っていましたが高山植物の美しさに感激していました。そんな姿に山に登る原点を私も思い出し楽しかったです。



イソツツジ



チシマキンレイカ



チングルマの群落



今年初の花パトロールを終わりました

心も身体も温まる不思議なレストラン クッキングハウスは笑顔があふれています



代表の松浦幸子さん

たり、うたったり、旅をしたり、人間らしく暮らすことを共にしながら、希望をもって生きていって欲しいと願い、活動しています」と紹介されています。現在、60人以上のメンバーが交代でできる作業をできる範囲で担っています。

その様子は毎回送られてくる会報「クッキングハウスからこんにちは」から伝わってきます。私も会員として遠くから応援してきました。クッキングハウス会を設立し、代表でもある松浦幸子さんが、私の銀河通信200号を祝う会にはるばる調布からいらしてくださいました。よりクッキングハウスが身近になり、30周年を祝う会に参加しました。メンバーのみなさんが自分たちの思いを歌にして歌う姿に涙が止まりませんでした。自分らしさを取り戻して、生き生きとした姿が目前にありました。松浦さんの表現をお借りすると「病気ではない部分を引き出すには、彼らが安心して自分をさらけ出す居場所が必要だと思った」と言います。

私も市民講座で学んでみたいと思い、3月に参加しました。私も抱えている悩みがありましたが、自分の中に閉じ込めて語れないことがありました。いろんな辛さを抱えてきたメンバーは場の平たさに自然に語り始めるのに、ずっと私も仲間に入れていただけました。それを受け止める場の素晴らしさに、ここでは、自分のままでいいんだと思えました。

松浦幸子さんは「人と人がお互いに自然に肯定しあえるようになれば、いい社会になっていくと思います」と言います。心に病気がある人も、スタッフも、その場に参加した市民も、ひらたい関係であるのがとても気持ち良かったです。ここは「世界で一番しあわせな食堂」だと思いました。

3月に観た映画「世界で一番しあわせな食堂」を少し紹介しますね。

本作の舞台はフィンランド北部・ラップランド地方の小さな村。中国上海からやってきた料理人チェン

と息子が食堂を経営するシルカと出会い、国籍や文化の違いを乗り越え、お互いを家族のように思いやる気持ちを描きます。

シルカはチェンの恩人捜しに協力する代わりに食堂を手伝ってもらうことに。チェンの料理は評判を呼び、食堂は大盛況。常連のおじいちゃんたちと親しくなるのです。薬膳スープも大好評。地元の恵み、トナカイや魚を使った料理が加わるのです。美味しい食べ物人は変える力があるのですね。

チェンは旅人としての違和を突きつけるのではなくその違和を地元の人々が食べたことのない美味しい料理をそっと差し出すのです。地元のおじいちゃんたちが物語に参加するのです。

「美味しいねから元気になる」クッキングハウスのようだ嬉しくなりました。クッキングハウスは、心を病んだ人たちが、地域で暮らしながら自分らしさを取り戻せる居場所です。ここで作るランチが美味しく、地域の人たちも利用し愛されています。3月にクッキングハウスに行き、どんな人も受け入れてくれる温かさに感動しました。相互理解もまた食からですね。クッキングハウスのHPは<http://www.cookinghouse.jp>からお入りください。

残念ながら、日本では心病む人たちが、地域で安心して暮らせる場所は圧倒的に少ないと思います。コロナ禍で、誰にも会えずに悩み苦しんでいる人は多いのではないのでしょうか。松浦さんは、感染対策をきちんとし、レストランを一度も休むことなく、開店して来ました。1回引きこもると、なかなか出て来られなくなることを知っていたからです。日々の努力の積み重ねが素晴らしいですね。

心の病を隠さずに、ありのままに生きる。平たく、認めあうことで、自分らしさを取り戻せる場所が遠いけれどあることに、私の気持ちも安らぎます。どうぞ調布に行く機会がありましたら、レストランに顔を出してみませんか？

読者の宮下嶺生さんがまとめられた「2021年7月キリバリ 菅政権関連の論評などから」の抜粋です。サンデー毎日（2021.7.11号）掲載の太田昌国氏への毎日新聞専門編集委員 倉重篤郎氏のインタビュー記事を紹介します。

安倍・菅政治の罪と罰」が論じられており、その2回めです。「言葉と歴史観を持たない政権は社会を惨めにする」と題されています。

なぜ「安倍・菅政治の罪と罰」なのか。/安倍晋三政権と菅義偉政権は別物だ、とのご意見もあろうが、私は一体として捉えるべきだと思っている。なぜか。まずは、基本政策が共通だ。「異次元金融緩和」全面依存の経済・財政政策、そして「従米的軍事力抑止の強化」一辺倒の外交・安保政策だ。安倍氏が始め、安倍(首相)・菅(官房長官)体制で深化させ(深みにはまり込み)、出口が見えないまま菅氏が首相として引き継いだ。/政局的にも一体だ。森友、加計、「桜を見る会」スキャンダルで土俵際に何度も追い詰められた安倍首相を裏から支えたのが菅官房長官であった。本来はポスト安倍候補の中にはいなかった、菅氏の首相就任を結果的に後押ししたのが安倍氏だった。菅再選カードを握るのもまた安倍氏である。霞が関強

権統治、ネポティズム(縁故主義)的権力私物化、国会野党勢力の軽視と政治手法も似ている。/この稿では、この安倍・菅一体政治の本質を「政治家としての言葉の欠落」「歴史認識の偏り、歴史修正主義」という切り口で民族問題・南北問題研究者の太田昌国さんに語っていただく。太田さんは、北朝鮮の拉致事件について、日本の言論が被害者家族を聖域化してナショナリズムを高揚させる異常さをいち早く指摘、右にも左にも偏らない歴史認識の物差しの重要性を強調した思想家である。近著に『現代日本イデオロギー評註「ぜんぶコロナのせい」ではないの日記』(藤田印刷エクセレントボックス)がある。コロナで変わったことと、コロナ以前からあった問題とをきっちり腑分けするのがジャーナリズムの役割だ、と指摘する。〔毎日新聞専門編集委員 倉重篤郎の前置き〕民主主義を毀損して恥じない首相 五輪強行、どう見る？

「あり得ない選択だと思う。しかも、開会式に2万人呼ぶ、という。この1年半世界が多くの犠牲を払い何を学んできたのか。どういう対処基準(ガイドライン)を確立させてきたのか。なぜロックダウンや人流規制をしてきたのか。それに逆行した愚行だ。一種の賭けに見える。菅首相は、国会では決定権がIOCにあるとしながら、G7で各国のお墨付きを得た、と言う。為政者は政権維持とナショナリズム高揚に五輪を使うが、リスクを取られるのは草の根の民衆だ 無責任としか言えない」/「税金が湯水の如く使われているのに情報開示はない。世論の反対や野党の国会での追及がガバナンスとして働いていない。政権中枢の人々は、ここまで来たらやめられないとも言うが、残念ながら阻止できない。これは我々の民主主義の問題だと痛感している」 政権のコロナ対策は？

「安倍、菅首相と最悪の政権下でコロナ事態を迎えた、というのが私の率直な印象だ。案の定、マスク配布、学校一斉休校などの思い付き的な施策を繰り返し、ワクチンも開発努力を放棄、重要性認識も遅れた。何よりも医療崩壊が少なからぬ犠牲者を生んだ。感染症ベッドの確保も遅れたが、この間の新自由主義的な政策で、医療体制は徹底的に痛めつけられていた。民衆が生活していくうえで必要不可欠で、かつ国家が担うべき医療や福祉、教育分野が、資本主義的効率性追求の掛け声の中で、劣化、疲弊し切っていた。いま、その結果を目の当たりにしている観がある」

コロナ以前の問題だ。「コロナが時代を大きく変えたのは事実だ。しかし、それを強調しすぎると見えなくなるものがある。コロナ以前の政治の延長線上にしか現在はない。第2次安倍政権以降の安倍・菅政治が一体どういうものだったのか。その総括こそが重要なのに、コロナの大騒ぎで全部チャラにされ、リセットされたらたまらない」

では安倍・菅政治とは？「先述の新自由主義的政策の行き詰まりもあるが、その本質は何かと問われれば、言葉がないことと、歴史観の偏った政治だろう」 「言葉について言えば、自らがなすべき政策、なしたい政策について人びとに伝えるもの

説明しようという意志と能力がない。国会の軽視にその姿勢が端的に表れている。野党の国会開催要求に応じない。議員の背後にいる人びとを見ようとならない。民主政治の根幹にある論争、言葉のやり取りがここまででないがしろにされた政治は初めてではないか」

「安倍首相の場合は、一見能弁だが、よく聞くとはぐらかしのオンパレードだった。まともに答える力がないのか、誤魔化し上手なのか。父の安倍晋太郎氏が生前に『(晋三氏は)言い逃れがうまい』と嘆いたというが、まさにそれを地で行った感がある。いわゆる『ご飯論法』の連続だった。平気で嘘もついた。例の『桜を見る会』では、衆院調査局の調べで118回虚偽答弁した、という」「菅首相の言葉は、それ以前の問題にも見える。官房長官時代の記者会見で『全く問題はない』『その批判は当たらない』で押し通した。許したメディアの責任も重いが、首相就任後もその延長線上だ。質問の趣旨に思いを致さず役人の準備した紙を読むだけ。五輪について何を聞いても『国民の安全と安心』を呪文の如く繰り返す。それでその場を乗り切れれば事足りた、と言わんばかりだ。『ヤギさん答弁』ではないが、議論そのものの拒否、無効化だ。民主主義の最も大切な部分を毀損して恥じない」「同時代の政治家では、メルケル独首相と対照的だ。彼女は真正面から問題に向き合い、国内外の人々に語り掛ける言葉を持っている。ドイツの戦争責任については、アウシュヴィッツ訪問時に『ドイツ人は犠牲者に対して責任があり、この歴史の解釈を変えてはならない』と明言し(19年12月)、コロナについては、政府方針の撤回を余儀なくされた際に「私の間違いだ。国民の許しを請う」と謝罪した(今年3月)。これに比べて安倍、菅両氏の言葉はなんとスカスカしていることか。言葉を持たない人が政治のトップにつく社会がどんなに惨めか実感した」

偏った歴史観とは？「その歴史修正主義的側面だ。我々から見れば不要不急の『戦後レジームからの脱却』実現が安倍政権の一貫した本質だった。歴史教科書批判から始まり、従軍慰安婦についてお詫びを表明した河野洋平(官房長官)談話の否定、靖国参拝へのこだわり……。自民党にも、かつては自国の戦前、戦中の歴史に責任を持つというリベラルな人たちがいた。大陸への侵略、朝鮮半島への植民地支配を加害者の視点から捉え直そうという人たちだ。後藤田正晴、野中広務両氏から戦争世代がその代表だ。この歴史認識路線に対し、それを自虐史観だと批判する歴史修正主義勢力が台頭、安倍氏がそのシンボルとして担ぎ上げられ、首相にもなった」

◇おおた・まさくに 1943年生まれ。民族問題研究者。拉致問題とともに沸き上がった自国中心的な排外主義を先駆的に批判した。著書に『「拉致」異論』『暴力批判論』『現代日本イデオロギー標註—「ぜんぶコロナのせい」ではないの日記』ほか

『放射線被曝の隠蔽と科学』ご希望の方は、住所・氏名・電話を添えて下記メールにて返信してください。送料・消費税なし3200円で送付いたします。携帯090-9516-3750、又は y.matsu0029@gmail.com 松元さんへ

Books



松元保昭さんから本の紹介です。関心のある方は是非お申しこみください。

被曝とともに生き格闘してきた科学者矢ヶ崎克馬

放射線被曝の隠蔽と科学

矢ヶ崎克馬著 緑風出版 3, 520円

原爆投下直後の隠蔽・被爆者放置からフクシマ避難民切り捨て「風評被害」の棄民政策に潜む「内部被曝」を暴き、いまも「知られざる核戦争」を続行する国際原子力ロビーのエセ科学を批判する！

本書の特徴は、各章冒頭の囲みで主張のエッセンスが科学的な公理として語られ、これを通覧するだけで探究の全体像がつかめる。国際原子力カムのエセ科学を科学方法論の根底から批判し、フクシマ後に隠蔽されてきた列島の被曝状況が暴かれつねに過小評価を導くその欺瞞的政策が、人権と人道の立場からきびしく告発される。

とくに、「原子雲」形成の機序解明、放射性微粒子を核とした「黒い雨」の正体、無視・誤認された「水平原子雲」と「黒い雨」雨域の科学的論証、またネバダのような乾燥地帯と異なる広島・長崎の多湿大気中における微粒子の力学的挙動の解析、内部被曝と外部被曝における電離作用の比較解明・啓蒙活動などによって、「放射線による被害はない」「被爆体験による特定精神疾患」などという国家の放射線汚染区域とその認定基準の過小評価の元となった重松逸造を座長とする「専門家会議」を徹底批判した、科学者としての著者の働きは圧巻。じっさいに、2003年から「原爆症認定集団訴訟」(いわゆる「黒い雨訴訟」)の19連勝に貢献した。

また3・11直後から、福島に足しげく通い放射線測定器を届け各地で学習会を開いたが、自ら被曝者となって病魔に襲われながらも、妻・沖本八重美が結成した「つなごう命—沖繩と被災地を結ぶ会」により「原発事故避難者通信」も93号を重ね実践活動にもとぎれなく力を注いできた。

こうして、ヒロシマ・ナガサキ・フクシマの被曝の実相を追い続け解明する著者の人生の始まりには、支えあい導きあってきた広島最年少の胎内被曝者であった妻・故沖本八重美との出会いと道行があったが、そのたゆまぬ活動記録は感動的でさえある。

本書は、ビキニを加えて四度の被爆体験をもつ被爆国日本における、絶大な国際的核権力に抗した稀有な科学者の現代に突き付ける闘いの記録である。「事実をありのままに認識することは民主主義の土台である」を座右の銘にし、どこまでも「誠実な科学」を追い求める著者：矢ヶ崎さんを応援し、共に学び、共に闘いましょう。ご協力いただければ幸いです。(パレスチナ連帯・札幌・松元保昭)

湿地の少女の成長物語



ザリガニの鳴くところ

ディーリア・オーエンズ著
友廣純訳 早川書房 2,090円

ノース・カロライナの湿地という大自然を背景に描かれる本書は、ひとりの少女の成長物語であり、殺人事件を追うミステリーであり、人の愛を描く物語です。著者ディーリア・オーエンズは野生動物学者で、自然環境をめぐるノンフィクション文学賞の受賞歴を持つ。野生が支配する土地の静寂、突然顔を出す生き物たちの躍動感、葦のざわめきや空気の湿り気まで伝わってくる情景描写が美しく詩的です。

こんな一節があります。「湖面ではたくさんの生き物が波に揺られていた。そして、その林の向こうの海からは潮風とカモメの音が流れてきた」。音楽が聞こえるようですね。カモメ以外にほとんど話し相手のいない日々が描かれます。

湿地帯の森に建つ小屋に住む白人貧困層家庭に生まれたカイアは、地域住民たちから偏見や好奇の目を向けられ、「湿地の少女」と呼ばれていました。カイアが6歳の時に、父親の暴力に嫌気がさし、母もきょうだいたちも家を出ていきます。カイアが10歳の時に父もいなくなるのです。

町の人々はカイアが存在を知っているのに、誰も助けようとはしない。彼女に手を差し伸べたのは、自活の手段を与え孫のように見守る黒人の夫婦と、兄の友人テイト少年だけでした。テイトはカイアに亡くなった妹の面影を重ねていて、ゆっくりと慎重に信頼関係を築いていきます。

14歳のとき、エビ漁師の息子テイトから読み書きを教えてもらうぐらひがあります。カイアは学校に行っていないので読み書きが出来ません。テイトが根気よく教えてくれるので、少しずつ彼女は字を読めるようになります。最初に読んだ本は、テイトの父親の蔵書である『野生のうたが聞こえる』でした。苦勞して読み終えます。「世のなかには野生から離れて生きられる者もいれば、生きられない者もいる」と知ります。「気づかなかった。言葉がこんなにたくさんのことを表せるなんて。ひとつの文に、こんなにいっぱい意味が詰まってるなんて」。この驚きが新鮮です。

切り株の上に置いた綺麗な鳥の羽の交換に始まり次第に恋に変わってゆく彼らの日々が瑞々しい。しかし、彼が大学に進学した後、再び会う日の約束も空しく、カイアの孤独はますます深まっていくのです。

湿地の小屋でただひとり生き抜いてゆく様子を描く過去の章と、湿地で若い男性の死体が発見される現在の章が交互に描かれます。疎遠になっていたテイトが、生物学者になって帰郷して、カイトの住む湿地の小屋で一緒に暮らせるようになり、生涯、二人の愛情と信頼は変わらなかったことに、安堵しました。

「ザリガニの鳴くところ」という題に惹かれました。私も、子どもの頃、一人で沙流川でザリガニ捕りして遊びました。体が赤く立派なハサミがあり、ゆっくりと動くので小さな子でも簡単に捕まえることができました。転校が多く、孤独な子ども時代、自然が私の友だちだったのです。そんな日々をふと思い出しました。

知ることから始めよう

核のごみ 考えるヒント

関口裕士著 北海道新聞社編
1,100円



核のごみの問題を長く取材する関口裕士編集委員の記事を中心に処分技術を研究する宗谷管内幌延町や青森県六ヶ所村、処分場建設が進むフィンランドの現地ルポや、処分地選定に向けた文献調査が昨年始まった後志管内の寿都町、神恵内村の動きを報告。図やグラフを多用した解説のほか識者や札幌の中学生との一問一答も掲載しています。

核のごみの厄介さを物語る二つの数字が「1500シーベルト」と「10万年」だ。

核のごみは、原発で使い終えた核燃料からまだ使える部分を取り出した後に残る放射能の極めて強い廃液で、ガラスと混ぜ固めた円柱形のガラス固化体にする。その製造直後の表面の放射線量が1時間当たり約1500シーベルトだ。国内で原発が動きだしてまだ半世紀余り。そこで生み出された核のごみは遠い未来の世代まで残る。

原発を運転すればどうしても生じる放射能の極めて強い高レベル放射性廃棄物(核のごみ)。全国で大量の使用済み核燃料が発生しており、今後製造する円柱形のガラス固化体に換算すると、既に約2万6千本分に相当する。その処分場所がないことから、原発は「トイレなきマンション」とやゆされてきた。世界でも処分地を決めているのはフィンランドとスウェーデンだけだ。放射能が人が近づいても安全とされるレベルに下がるまで10万年かかる。3世代を100年とすると、3千世代先だ。過去にさかのぼれば言葉も通じないネアンデルタール人の時代だ。

未来に責任を持たない核のごみの行方とともに核燃料サイクルを今後どうするかも課題です。

北海道を核のごみ捨て場にしているのか？本書から考えてみませんか。



映画はジャーナリズムだ

キネマの玉手箱

大林宣彦著 ユニコ舎
1,650円

映画監督の大林宣彦さんは、肺がんが分かり、2016年8月に余命

半年と宣告されながら楽天的な性格と、深い人間愛で人生を生き、2020年に「海辺の映画館—キネマの玉手箱」を公開し、その年の4月10日に亡くなりました。

本書にこんな一節があります。「僕は癌にかかったことで、人間の傲慢さを知り、表現者として間違いを犯しそうだったところをもう一度立ち返って、他者にやさしくする術を学ぶことができた。略 僕の表現はより良い方向に向いていると感じている。明日のために癌が役に立っているのだ」。

「戦争は嫌だという実感だけは伝えよう」とする見

方を持つ元軍国少年として、「映画で歴史は変えられんけど、歴史の未来は変えられるんかもね」と書く未来人として、映像の魔術師であり続けました。病気も味方につけて、最後まで豊かに生き抜いたのです。

チャップリンの作品について「処女作はすべてを語る」というエピソードが面白い。「黄金狂時代」や「モダンタイムス」「街の灯」「チャップリンの独裁者」など名作はたくさんあり、私も大好きですが、監督は「犬の生活」にすべてが込められていると言います。楽しいだけでなく、チャップリン特有のヒューマンイズムが込められていて、チャップリンの映画人生がすべて写っていると書いています。そして最後に自分の人生で大切にしてきたのは「16歳の自分だ」と言うのです。16歳は多感で、正直で、傷つきやすく、そして夢のある人生の季節。悩んだとき「16歳の自分ならどうするか」と自問してきたと。人生最期のその日まで、ずっと16歳のベテランであり続けたい。そうやって少年の心のままで亡くなったことに、私は自分の人生で大切にできたことは何だろうと考えさせられ、泣けました。

平和をテーマに映画を作ってきた大林さんを忘れません。玉手箱にある小津安二郎や大島渚、是枝裕和といった監督や西部劇への思いも語ります。

是枝裕和監督のこと、山田洋次監督と一緒に胴上げしてあげたいって言っていたそうです。それを受けてバトンを渡されたとあとがきを書いた是枝監督。「大林さんは『ふたり』ではなくなった姉の幽霊と生きる妹をファンタジックに、『はるか、ノスタルジィ』では自分の過去と向き合う小説家を通してノスタルジックに描いてきました。そして戦争を題材とした最近の作品は戦死者と私たちが生きていることがどう関連しているかということ直球で描き出しています」と書きました。大林さんは天国で喜んでいと思います。

訴歌

日々の喜怒哀楽を伸び伸びと詠う

訴歌（そか）

あなたはきっと橋を渡って来てくれる

阿部正子編 皓星社 1,980円

抗い、生き、歌った！
ハンセン病療養所の
命の一行詩
短歌・俳句・川柳

私がハンセン病に関心をもつようになったのは、在職中に青森にある国立療養所松丘保養園に取材で訪れたことからでした。「砂の器」を観ましたが、北海道から、たくさんのハンセン病患者が、松丘保養園に連れていかれたことを知りませんでした。道央のある街で鉄道員だった男性は、ハンセン病と分かったと、自宅前に消毒薬をまかれ、貨物列車に乗せられ、函館からは青函連絡船の船底に入れられて松丘に入ったと語りました。差別と偏見にさいなまれた人々の苦しみ、悲しみ、怒りの言葉に申し訳なさいっぱいになりました。

本書の千人余りの作者は、ある日突然、隔離された少年・少女や若者や幼い子を持つ母親や父親です。日々の喜怒哀楽を巧みに歌に詠み、生き抜きました。亡き者とされた人々にとっては、歌は命の証。人はどんな過酷な状況でも、誇り高く生きられることを、歌（訴歌）に託して後世に伝えようとしています。（帯文）

ハンセン病療養所のなかで紡がれた文字は、時を越えその慟哭を今に伝えます。国のハンセン病療養所で詠まれた短歌や俳句、川柳約3300が収録されています。

「病む吾とみまもる母の乗り足れば客車の扉に錠下ろされつ」（山本吉徳）、「生きぬけと短き便り牡丹雪」（小野寺花子）

松丘で会った女性にも短い便りでもあれば、母への思いはきっと温かい感情を残したのにと思った日のことを忘れません。

Cinema Graffiti 〈私の映画評〉 シネマグラフィティ

絶望的な状況でも希望を失わずに
「生きる意味」を問う
『トゥルーノース』

樋口 みな子

札幌映画サークル会報
シネアスト
2021年
8月号掲載



アメリカのテレビ番組で「政治の話はしませんよ。かわりに物語をお伝えします。私の家族の物語です」。その言葉から始まる本作のストーリーは、北朝鮮の強制収容所が舞台です。導入が秀逸。これから始まる物語に違和感なく入っていけました。

1970年生まれで在日4世の清水ハン栄治監督・脚本のアニメーション映画です。過去に人権をテーマにプロデュースした偉人伝記マンガシリーズを手掛けており、それは世界15ヶ国語に翻訳され、ダライ・ラマ法皇に認められ亡命チベット子女たちの教科書になったりしたというのですから、アニメは初めてでも人権への関心は深く、その思いはビシビシ伝わってくる作品です。

監督は収容体験を持つ脱北者や元看守ら取材して10年かけて完成させました。「起きているのは現代

のホロコースト。どうしても世界に伝えなくてはと思った」「無実の子どもたちが強制労働をさせられているのは絶対に許せない。人権蹂躪はよくないと言いつけていきたい」と語っています。

収容所の恐るべき実態を描きつつ、家族愛、仲間との友情や、ユーモアも盛り込まれます。死んでいく人へのいたわりの心情が表現され、絶望から希望を見いだせるような内容になっていました。

映画では、テレビの人気番組に始まる現在とヨハンたちが連行されてしまう1995年から2004年までを時系列として明示しています。父は政治犯の疑いで逮捕され、行方が分からなくなる中、日本から



帰還事業で北朝鮮に戻った少年ヨハンと妹ミヒと母ユリは強制収容所に連行されます。最も過酷な場所で、

希望を捨てずに生き抜こうとする者たち。北朝鮮の政治犯強制収容所に生きる家族を描きました。登場人物はごつごつとしたペーパークラフトのような凹凸があって、最初はびっくりしました。観ながら、残酷さが和らげられ、下を向かずに全編に集中できました。骨ばった顔は、食料不足の飢餓感を表現していると思いました。

決してナチスのアウシュヴィッツのような戦時下の話ではありません。まさに今、起きていることにショックを受けました。収容所は食料は乏しく、見せしめの公開処刑、監視されながらの強制労働、密告などが日常的に行われ、胸がえぐられます。アニメならではの没入感で疑似体験させられます。それにも関わらず、この映画に目が離せないほど惹きつけられ、心が揺さぶられました。子どもまでもが強制労働を強いられるとは許しがたいです。監督は人権という普遍的なテーマで、世界中の多くの人に届けたいと考えアニメにしたとも言います。その思いは伝わったのではないのでしょうか？英語で制作したのも良かったです。

ヨハンは聡明な子でした。しかし父からは認められていないとずっと感じてきたのです。理由もわからず強制収容所で働かされ、次第に家族を守るために体制側へと染まっていく中盤。過酷な労働を強いられ、厳しい生存競争のなか、ヨハンは次第に純粋で優しい心を失い、他人を欺く一方、母ユリと妹ミヒは人間性を失わず倫理的に生きようとしていました。母はヨハンに「誰が正しいとか、間違っているかではない。『誰になりたいか』を自分に問いなさい」と諭す言葉にハッとさせられました。ヨハンが密告をして恨みを買って母がその犠牲になってしまいます。ヨハンが、誰かのために生きる道を模索します。ミヒが思いを寄せる孤児のインスラと生き延びる方法を考えるのです。

ミヒが「赤とんぼ」を歌って女性収容者の望郷の思いを慰めるシーンも温かい気持ちになりました。地獄としか形容し難い生活の中でも生きる目的はあるのか。そんな劣悪な環境の中でも動植物や星など、自然の美しさを描写していたのが印象的でした。停電が日常茶飯事の北朝鮮では、夜は真っ暗闇に包まれ、美しい星空が顔を出します(韓国ドラマ『愛の不時着』でも満天の星のシーンが印象的)。

監督はアウシュヴィッツを生き抜いたヴィクトール・E・フランクルの「夜と霧」から感化、ひらめきを受けたと語っています。私もずいぶん前に読み、かなり内容を忘れてしまい7年前にアウシュヴィッツ博物館に行く前に再読しました。精神科医だったフランクルは、冷静な視点で収容所での出来事を記録するとともに、過酷な環境の中、囚人たちが何に絶望したか、何に希望を見出したかを克明に記しました。収容所では、極限状態でも人間性を失わなかった者がいた。囚人たちは、時には演芸会を催して音楽を楽しみ、美しい夕焼けに心を奪われます。フランクルは、そうした姿を見て、美や真理、愛などを体験する喜びがあると考えるようになるのです。運命に毅然とした態度をとり、どんな状況でも一瞬一瞬を大切にすること。それが生きがいを見いだす力になるとフランクルは考えました。このアニメでも、そんな場面が随所にあり救われます。

本作は陰惨で無機質な強制収容所の描写はリアリティがあり、妥協は感じさせません。衝撃的な物語を実写でなく、あえて親しみやすいタッチのアニメ映画にすることで、かえって収容所の生活の過酷さが際立つのです。

『トゥルーノース』というタイトルには、2つの意味が込められていました。ひとつは、「真に重要な目標、めざす羅針盤」を意味する英語の慣用句。もうひとつは、文字通り「北朝鮮の真実」です。監督の真実を伝えねばとの思いが、全編を貫きます。脱北者らからの丁寧な取材に、監督の人間性が伝わってきました。

(C) 2020 sumimasen



幻のライブが49年の時を超えてよみがえる

アメイジング・グレイス/アレサ・フランクリン

シドニー・ポラック監督

「アメイジング・グレイス」を歌うシーンではアレサも聖歌隊も観客も、すべてが一体となった瞬間を、その場に放り込まれたカメラのように、興奮と熱気をともに感じながら刻まれています。

まるで私も教会で聴いているような臨場感がありました。アレサ・フランクリンの息遣いや、歌にこめた思いが、ピンピンと伝わってきて、涙があふれました。

この歌はイギリス人のジョン・ニュートンの船が嵐に襲われ沈没しかかった時に、必死に神に祈り、助かっ

た経験から作詞されたという。神の恵みに感謝し称える歌が、アレサが歌うと神々しく、心が洗われました。豊かで力強い歌声に励まされました。

49年と時を経てよみがえるライブを収めた本作はコーネル・デュプリー(ギター)、チャック・レイニー(ベース)、バーナード・パーディー(ドラム)らに加えサザン・カリフォルニア・コミュニティ聖歌隊をバックに、アレサが自らのルーツであるゴスペルを感動的に歌い上げた伝説のライブをドキュメンタリー映画として撮影したものです。若き日のローリング・ストーンズの姿も見えました。

私は2ヶ月前に観ましたが、少し前までロングラン上映が続きました。3回も観にいらした方もいるとか。コロナ禍で、人に会うのも難しく、不安や孤独を感じている人たちにこそ是非ゴスペルを聴いてもらいたいです。

新しい文字の可能性を信じた人 たちの物語



王の願い ハングルの
始まり

チョ・ Cholヒョン
脚本・監督

世界で最も合理的な文字、と言われるハングルの誕生を巡る物語。

1442年、朝鮮第4代国王・世宗の時代。これまで朝鮮には自国語を書き表す文字が存在しておらず、上流階級層だけが特権として中国の漢字を学び使用していました。この状況をもどかしく思う世宗(ソン・ガンホ)は、すべての民が容易に学べて書くことができる朝鮮独自の文字を作ることを決意。自分が治める人々に様々な知識を広めたいと、何カ国もの言語に詳しい和尚シンミ(パク・ヘイル)とその弟子たちを呼び寄せ、協力を仰ぎます。王を取り巻く臣下たちは、国の最高位である王様が最下層の僧侶と手を取り合い庶民に文字を与えようとしている前代未聞の事態に激しく反発。逆境と葛藤のなか、世宗大王とシンミは民へ贈る新たな文字作りに突き進んでいきます。

世宗王が貫くのは“民の暮らしファースト”という姿勢。民のためなら慣例も身分の違いも気にしないという破天荒な王であり、日照りが続き苦しむ民のために雨乞いをし、天に向かい土下座する姿を見せつけている。そもそも文字を創造するというのも、一部のエリート層だけでなく全国民が読み書きできる文字を作り「あらゆる知識を民に分け与えたい」という思いから。「パラサイト 半地下の家族」で主演したソン・ガンホが演じると説得力があるからスゴイ。

この新しい文字は、国じゅうの民に広く使ってもらうためのもの。そのため、文字数はなるべく少なく、読みやすく、書きやすいという“わかりやすさ”が肝心！多様多彩な発音をいかにシンプルな文字に変換していくべきかと、世宗王、シンミらは試行錯誤を繰り返すのです。

ソホン王后(チョン・ミソン)は仏教徒として、王とソンミの間を取り持つ重要な役割を担います。「多くの女人は親への書状すら書けず、安否を知ることもできない。女官たちが新たな文字を学び、世の中の女人に広め教えるのです」と語ります。物語は堅苦しくなく、ユーモアもありながら、文字作りの魅力があふれていました。ソホン王妃の聡明さ、対立する者のすべてを包み込む包容力が素晴らしい。

亡くなったソホンの供養の場は、新たな文字であるハングルを広めるための決起集会になります。王妃に仕えた女官たちと、シンミに従う修行僧たちと儒教の正装をした世宗の2人の息子。儒教という体制側に抗して、マイノリティの仏教徒が集結します。前途多難だが、同時に希望に満ちた未来を匂わせて、この映画は終幕を迎えます。登場人物たちが語る「国を滅ぼすのは真理ではなく、私利私欲だ」「無理に規範を作ることは、善意を伴った暴力だ」などというセリフには、現代にも通じるものがあり、監督の映画にこめた思いに感動しました。

喜びと幸福に満ちたメッセージ



アメリカン・ユート
ピア

スパイク・リー監督

コロナ禍で、さまざまなコンサートも中止になりました。音楽への渴望を感じる日々を送っている人たちも多いと思います。私はいろいろな事情で、映画館に行くのも簡単ではありません。日中の数時間をどこで取ろうかといつも考えています。でもこの映画は観て楽しかったです。

デイヴィッド・バーンは、「いま、世界で起きていることを表現したかった。これまでより責任のある行動に出たかったんだ」と知人のスパイク・リー監督に相談し、ニューヨーク公演を観てもらい再構築して映画化しました。

舞台裏からの独特のアングルに加え、デビット・バーンの一座がジャネール・モネイの「Hell You Talmbout」を演奏するシーンでは、曲中の、不当な暴力の犠牲となったアフリカ系アメリカ人らの名前を繰り返す箇所に、その遺族たちのショットをかぶせるような演出が施され、黒人の尊厳を正面から訴え胸に迫りました。

バーンは様々な国籍を持つ11人のミュージシャンやダンサーとともに舞台の上を縦横無尽に動き回り、ショーを通じて現代の様々な問題について問いかけます。誰も靴を履かず素足。グレーのそろいのスーツでした。まるでマーチングバンドのように体に楽器を装着して、舞台上を自由自在に動き回ります。こんなステージ見たことはありません。

曲の合間にバーンは聴衆らに投票を呼びかけ、人間の脳の能力を論じ、いかに自分が世界を違う視点から見られるようになったかを語っています。インタビューに「選挙というのは、自分たちがどのような形で代表されることになるのか、この国がこの先どんなふうになっていくのか、どこへ向かい、どんな決断が為されるかといった部分に自ら関わることのできる、実に大きな機会なんだよ」と語っています。政治への参加を促し人間性をつくりあげるのは「他者とのつながり」などのメッセージが心に響きました。

■夫澄生さんに大きな病気がみつき、病院探しに奔走して2ヵ月がたちました。そのまま放っておくと失明したり、体の自由も利かなくなります。ようやく手術してくださる先生と出会えました。でも普段日本にいらっしやらないので、9月末の手術になります。次号の発行は10月になることをご了解ください。(みな子)

購読料と寄付をありがとうございます
(敬称略) 6.3~7.2

文聖姫 高橋儂 宮森多恵子 竹田とし子 細田伸昭
木村玲子 反橋一夫 志田郁夫 岩井善昭 則末尚大
合計 31,000円は印刷と送料に使わせていただきます。
Webに切り替える方はお知らせ下さい。郵便振替「銀河通信」
02740-7-56535 をお願いします。